

山東大学（威海）刘昊昕

### 世界と抱き合おう——『人間失格』を読んで

戦後の日本はきっと最も空虚な時期に入っていた。青年は意欲もなく、ひねもすぼうっとして、世の中の何たるかなど分からなかっただろう。太宰治の描く大庭葉蔵はそうした中のひとりで、彼は虚無と空虚を追い、世の中を恐れ、世間の人を避けて、恐れの中で自分の短くもおかしい一生を送った。日本の戦後の無頼派を代表する人物である太宰治は当時の日本文化の縮図だ。彼は退廃的な筆致で読む者の心を深く動かし、伝統的文学に反対して、批判と思考を提唱し、当時の日本文学を多様性へと向かわせた。

この本を開くと、一筋の悲しい空気が中から広がってくる。太宰治の文章は確かに華麗で優美だが、華美な下では憔悴している。ちょうど彼の作り出した大庭葉蔵のように、富貴な家で裕福な生活をしていながら、至る所に気を遣い、本当に楽しい時間というものがない。彼は道化を通じてしか家で生存することができず、「人間に対する最後の求愛」と自称している。小さいうちは本来なら天真爛漫な時期のはずだが、至る所で人の顔色を窺って暮らしていた。彼は生まれつき心の痛みを抱えていて、自分の家でも少しも気の緩むことがなかった。男性に対しても女性に対しても決まった向き合い方があり、道化者のように、微笑むマスクの下には人に言えないような辛酸が隠れていた。大庭葉蔵の幼い頃が何故これほど苦痛だったのか、分別がない年頃はこの世界に対して好奇心に満ちているべきではないかと納得できない人もいるだろう。しかし誰でも自分を幸せにできる能力があるわけではないこと、生まれつきのペシミストもいるということを忘れていない。人間性に直面して、そもそも把握できる人などいない。むしろ大庭葉蔵はこの世界より人間性を恐れていたのだ。彼が見たもの、耳にしたものは人間性の醜さと凶悪さだけだった。人々から適当にあしらわれ、彼は恐ろしさとなすすべの分からなさを感じたのだろう。彼は人々の怒る顔から獅子よりも鱈よりも竜よりももっとおそろしい動物の本性を見抜くことができた。こうした獣性はずっと人々の心の中に潜んでおり、あるとき急に爆発して、醜さと凶悪さを余すところなく吐き出すのだ。人間性についての太宰治の描写は人をぞっとさせるが、そうした本性が本当は誰の心の底にも隠れているのだということを否定する力はない。

人間失格とは人である資格を失ったということだが、それは大庭葉蔵の自分に対する見方だ。彼は自分を放逐し、酒に酔って、自殺して、薬物で自分を麻痺させ、世間の人々の目に映る彼はとっくに人と呼べないものになっていた。しかし、「失格」なのは彼本人だけだろうか。大庭葉蔵の人生の中で、彼に深淵へと踏み出すのを促したのは、彼自身だけでなく、彼の人生に現れた「人」らもだ。まず彼の父だ。父はもともと落ち着いていて信頼できる模範であるべき存在のはずだが、葉蔵の父はひたすらただ俗世間のものさしで彼に求めるばかりで、息子に手配の済んでいる道を確認に歩くように求めて、息子自身の考えを少しも顧みず、息子の内心の世界に関心を持つこともなかった。外出してプレゼントを持ち帰るたび、

彼は子供達にどんなものが欲しいかと尋ね、答えが自分の計画していたものと違うともう不満だった。プレゼントはもともと人に期待させるものだが、小さい子供にとっては内心びくびくする束縛になってしまった。このくだりに思わず今の家長達を思い出した。彼らが自分で最も良いと思うものを子供に押しつけるだけで、子供が本当に欲しいものを聞くことはなく、そして最後には自分もまた子供に理解されないことで意気消沈する。自分が子供を理解しようとせず、子供に理解されるわけがない。葉蔵の後の友人、堀木正雄もある種の「失格」な人だ。友人の間柄は、もともと何でも話せて互いに助け合うものである。正雄は彼を連れて酒を飲み、女性とつきあって、最後に直接彼を精神病院に入れるに到るまで、絶えず大庭葉蔵を深淵に押し込んでいた。彼を誤った方向へ導き、ある種の嗜好を通じて楽しくなれると思わせたが、そうしたいわゆる快樂はとても分かりやすく、とても短くて、続くさらに大きな苦痛を代価にするのだ。友人でありながら、一人が深い穴に落ち込んでしまったとき、もう一人は救いの手を差し伸べないどころか、這い上がろうとする道を塞ぎ、笑って彼をあおり穴に落ち込むことを選ばせる。すでに人間性に対する望みを喪失している葉蔵に対して、正雄は友人に対する最後の幻想も消え尽きさせ、しまいには地獄へ落としてしまった。

この壊滅的な文学の本を悲しくて憂鬱だと感じ、人間性への不信でいっぱいになる人もいるだろうが、この本はさらに深いレベルでプラスの力を伝えてくれている。以前は私は日本の文学は大部分がもの悲しく美しいものだと思っていたが、太宰治の描写を通して、私には傷の痛みの奥に無視できない力が隠れているのが見えた。こうした理想を求める力は、戦後の人々の心の慰めになったことだろう。私達の目にする大庭葉蔵は醜い人間性に触れたことで生活に対する希望を失ってはならず、そうした状況で絶えず抗争している。最初の抗争は「道化」で、彼は人間性がとても恐ろしいと感じながらも、彼は自分のやり方でこの世界に溶け込もうとした。彼は完全に自分を閉ざすことができたが、それでも、本心かいつわりかはともかく積極的に人と交流した。最後の抗争は、彼がすばらしいと感じた娘、ヨシ子と結婚したことだ。大庭葉蔵の人生は竹一が「女に惚れられる」と言ったように、ずっと女性がそばにいた。彼がはまり込むことはなかったが、彼はヨシ子が彼にすばらしい生活をもたらすと信じており、失敗で終わったものの、理想の追求も諦めていなかった。この本には共鳴する人もいるが、私はそれよりも、すべての読者がそういう不安な価値観の共鳴を感じると同時に、生活の理想の追究を諦めない気持ちになってくれればと望んでいる。生まれつき悲観的な自分を変える方法はないが、心から自分を受け入れよう。太宰治は「人として生まれ申し訳ない」と書いている。これは、この世界に申し訳ないなどと思わず、自分が公開しない方法を探す努力をしてほしいということだ。いわゆる醜さのために、黒い雲の向こうにある日の光を逃さないように。「弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我するんです。」心の底のかびが生えた臆病さをすべて捨てて、日に当てて乾かしてほしい。頭を下げて両腕を回し、心から自分と抱き合おう。たとえ完璧ではないとしても。顔を上げて両腕を開き、思いきり世界と抱き合おう。醜さ凶悪さを恐れる理由などない。

心から自分を受け入れ、思いきり世界と抱き合おう。